県内地域史研究会紹介（五）

杵築郷土史研究会

①会　　名　杵築郷土史研究会
②事務局所在地　杵築市大字南杵築二四八八の一
　中野博行方（〇九七八六―二―二一一五）
③発足年月日　昭和四十五年五月十六日
④会　長　名　田所成彦
⑤会　員　数　一四六名（平成八年四月現在）
⑥会誌名・年発行回数　『郷土史杵築』年三回
⑦近刊発行の主な目次

〔第九十五号〕
「忘れられた神々と野仏・杵築」江藤弘

〔第九十六号〕
「菊本・山の神祭」諸富道則、「杵築新四国八十八ケ所」山内林凱、「市内の鍐絵探訪記」中野博行、「会員名簿」事務局

〔第九十七号〕
「元田竹渓先生伝」伊串憲一、「木付氏十二代親家に関する記事の誤り」加藤柾、「武蔵郷巡礼記」松岡重美、「藤川地区史跡めぐり」二階堂智査子、「佐野邸の建築年代について」鷲司哲暲、「大内地区神仏を尋ねて」富岡逸子、「市内小学校教育年表」佐藤孝義

〔第九十八号〕
「豊後の磨崖仏」熊野御堂啓治、「古代杵築地方の砂鉄」江藤弘

〔第九十九号〕
「米国モンタナ州で活躍した杵築人・堀本太郎」久米忠臣、「杵築藩出身の蘭方医　工藤謙同についての資料集」久米忠臣、「遺聞・宮本武蔵」加藤柾、「八坂めぐり」上添治、「零式艦上戦闘機」吉武忠雄

〔第百号記念号〕
「杵築郷土史研究会の歩み」後藤安臣、「若宮楽の継承伝達について」本田秀信、「『こやし』と火薬」藤原孝顕、「杵

築郷土史研究会の歩み(その一)」佐藤孝義、「おひと(大人)の足形」高島直人、「『文教の地』杵築に思う」大林正宏、「郷土史研究会の思い出」久米忠臣、「民の呻き、神・仏の呼ぶ声」松岡重美、「一枚の写真」平野芳彦、「先哲とその背景」長谷部千介、「杵築の地震」元島集、「宮本武蔵と杵築」後藤安臣、「郷土史『杵築』百号までの目録」編集部

〔第百一号記念号〕

「二十五年目の杵築城」二階堂智査子、「洞達亭遺稿抄」鷲司哲暲、「若宮八幡宮御由来」物集高見、「佐野家所蔵書籍目録調査」久米忠臣、「杵築藩(城下町)災害の記録」中野博行、「杵築藩災害発生一覧」中野博行、「東村巡りの詩(一)」安倍鷹満

⑧ 沿革並びに活動状況

杵築郷土史研究会の前身は昭和十五年十一月、大先輩土居寛申氏を中心とした、郷土の歴史研究を進めて来た数名の同志の集まりが、「杵築史談会」の名のもとに杵築藩のうずもれた文化遺産を掘り起し、その顕彰に取り組みはじめたのにはじまる。その後、戦争のため一時活動は中断されたが昭和三十年杵築市誕生を機に、再出発し「会誌杵築史談」に研究成果を発表してきた。しかし、昭和四十年に第二十号を以って会の終わりを告げた。

この史談会の研究の成果は、郷土の歴史を語る上で実に貴重な史料であり、それは「杵築市誌」の編纂に大きく寄与し、当然、会員はその委員として力を発揮した。

新生「杵築郷土史研究会」は、昭和四十五年五月十六日に同志八名による「杵築郷土史愛好会」の名のもとに産声を挙げ、更に翌昭和四十六年秋から「杵築郷土史研究会」と改称された現在に至っている。会誌の創刊号も同年で、二十五年目の今年、百号記念号にたどりついた。

発足以来の諸事業の歩みの中で、特記すべきものは、杵築藩「町人の生活」全十巻の出版で、「町役所日記」の解読と、松平氏治政下の元禄十五年から明治初年までの原本記録である。

当会は「特に専門的な、学者的な研究ではなく、郷土の歴史に興味と関心を持つ人が、更に理解を深め、先人の残した文化遺産を後世に語り継ぎ残していく」ことを活動の目的としており、現在百五十名近くの会員をかかえ、(イ)会誌発行年

三回　(ロ)市内見学研修会二回、バス利用による近隣各県市町村の歴史探究年一回　(ハ)会員研究発表会及び講演会の開催、(ニ)市内文化財保存事業への参加及び奉仕作業等々、地道ではあるが内容の深い活動を展開している。

（事務局長　中野博行）